

今中 友望 (リハビリ部)、久木田 和道 (リハビリ部)、岡本 浩幸 (リハビリ部)、  
今村 栄次 (脳神経内科)、若林 伸一 (脳神経外科)、梶川 博 (脳神経外科)  
演題『当院における脳卒中片麻痺患者のトイレ動作とBerg Balance Scaleの関連性』

#### 【目的】

脳卒中片麻痺患者のリハビリにおいて、トイレ動作獲得は自宅復帰する上で重要な因子とされている。また車いす使用は自宅復帰を阻害する因子となる。そこで本研究では車いす使用者のトイレ動作とBerg Balance Scale (BBS)との関連性を明確にすることで、目標や治療立案などの一助になると考え検討した。

#### 【方法】

2014年10月1日から2015年12月31日の間に、当院回復期病棟から退院に至った脳卒中患者183名のうち、退院時に車いす・トイレを利用していた19名を対象とした。退院時トイレ動作能力をFIMを使用し自立群 (6名) と非自立群 (13名) に分類し比較検討した。2群で個人因子、機能因子、BBS合計点、BBS各項目点、リハビリに関わる因子、それらの各項目に対し単変量解析を行い、有意差を認めた項目で多変量解析を行った。すべての検定において有意水準は全て5%未満とした。

#### 【結果】

単変量解析の結果、退院時BBS合計点、BBS項目の立位保持・座り・閉眼立位保持・閉脚立位保持・振り返り・360度方向転換・タンデム立位・片足立位、HDS-Rで有意差を認めた。これらで多変量解析を行いBBSのタンデム立位が抽出された。

#### 【考察】

タンデム立位保持が重要であることが示唆された。理学療法では、静的・動的立位バランスの向上を目的とした介入が必要である。その中でも前後左右方向への動揺に対して、狭い支持基底面内での左右足部の協調的な運動が必要であると考えられる。